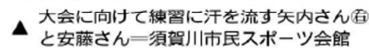


「パスを回して」「シュート」。今月下旬、須賀川市民スポーツ会館にバスケットボールをする選手たちの声が響いていた。「目標に向かって仲間と頑張ることに達成感がある。体調も良い方向に向かっていっていると感じる」。選手の一人で国際大会に出場する古殿町の矢内寛樹さん(35)は話す。矢内さんは数年前に心の不調を訴え、うつ病になった。「はたから見たら分かりづらいが、人がいないところで気持ちが沈む」ことがある、という。

別の目には、精神障害がある白河市の角田敏一さん（40）が市内で練習に励んでいた。角田さんも矢内さんと共に国際大会に出場する。小学生の時からバスケットボールに打ち込んできた角田さんは、30歳でうつ病を発症。なかなか症状は改善しなかった。どんな人でも発症する可能性があることを分かってもらえたらうれしい」と感じている。

「精神疾患がある人への

偏見は根強いと感じている。安心して体力向上に取り組める場を提供したい。対象にした大会は限られて矢内さんや角田さんが所属しているため、安藤さんが交わってほしい。そんな願いを抱きながら、矢内さんと角田さんは世界の舞台に挑戦する。（高橋由佳）



▲ 11月30日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

障がいを持っている人たちに対する偏見をなくしていくために、私たち一人ひとりにできることは何だと思いますか。

